# きせつのおと-NOTE-

目次

Hello, Again ・・・ 2
猫の散歩 ・・・ 11
猫の夢 ・・・ 14
季節の音 ・・・ 17
幸せになりたい私たち ・・・ 20
あとがき ・・・ 26
奥付 ・・・ 27

# Hello,Again

この北の大地にも、遅れて春がやってきました。

桜はその花が開くのと同時に、ゆっくりと目を覚ましていきます。
そして桜が散ってしまえば、桜はまた、長い長い眠りにつくのです。
そのため、一年のうち桜が目を覚ましているのは人間でいう二週間ぐらいだけなのでした。

けれど、この公園にある桜はそのことを不幸だとは思っていませんでした。
この公園には、桜の木はたった一本しか植えられていません。
桜が目覚めると必ず、その周りには誰かが訪ねてきてくれて、いつだって楽しかったからです。

桜のもとには、いたずらすずめがよくやってきます。
そして、あるとき「君なんて、花が咲いてないときはひとりぼっちじゃないか」と言いました。
でもいいんだよ、と桜は言いました。
長い長い夢をみるとき、出てくるのはいつだって、楽しかった思い出たちです。
寂しい思い出なんて、ひとつもなかったのです。

「こんにちは、桜さん」

近頃は、朝の早い時間からひとりの少女がやってくるようになりました。
ふんわりとした短い髪に、セーラー服を着ています。肌寒いのか、水色のカーディガンを羽織っていました。

「今日も、絵を描かせてね」

彼女は誰でしょう。
見覚えがある気がするのですが、桜はなかなか思い出すことができません。

こっそりと心の中で首をかしげているうち、少女はそばのベンチに座ってスケッチブックを広げました。
さらさらと、瞬く間に手が動き始めます。
それが上手いのか、そうでないのか、桜にはよくわかりません。
でも、真剣な目でじっとこちらを見て、スケッチブックにえがこうとしてくれているのはよくわかります。
少し照れてしまい、桜はいくらか花を散らしてしまいましたが、少女は気づかないようでした。

「おねーちゃん、滑り台、滑りたい！」

ふいに、そんな小さな女の子の声が聞こえてきました。
公園に入って来るなり、かわいらしいリュックを背負った女の子は、滑り台へと走っていきました。

「元気だねぇ、こけないよう気をつけるんだよ」と、女の子につきそう髪の長い少女が言いました。

短い髪の少女とは、同じ年頃かもしれません。
短い髪の少女は、スケッチブックに顔を落としたままです。熱心に、鉛筆が動き続けています。

「わかってるよぉ！　……うわぁ！」

振り向き叫んだ女の子でしたが、勢いよく振り向いたせいでしょうか。
桜も、大きく揺らめいてその少女の危機を察知しますが、どうにもなりません。
つんのめった女の子は、バターン！と大きな音をたてて、顔からこけてしまいました。

「う、う、う……わぁ、わ……うわーんっ！」

それがまた、あの髪の短い少女の目の前なのです。
さすがの少女もびっくりした顔で、女の子をぽかんとみつめています。
髪の長い少女は、慌ててそれに駆け寄りました。

「ちょっと、もう！　だから言ったじゃない」
「だってぇ……だってぇ奈美お姉ちゃん……」

慌てて叱りながらも、どこか怪我はないかと確かめる髪の長い少女。泣きべそをかいている女の子。
そんな二人をみつめながら、髪の短い少女は、思わずといった様子で声を出していました。

「奈美？」
「え、なに？」

髪の長い少女は、自分が呼ばれたと思って顔を上げました。
ぱちん、と二人の少女はそうして目をようやく合わせたのです。
暫く沈黙がありました。泣いていたはずの女の子も、きょとんとして二人の顔を見比べています。
どれぐらい時間が流れたのでしょう。やがて、口を開いたのは髪の長い、奈美と呼ばれた少女の方でした。

「佐那？」

桜は一瞬どきりとしました。自分が呼ばれたのかと錯覚したのです。
けれど違いました。佐那と呼ばれた髪の短い少女は、はにかんで頷きました。

「うん、覚えててくれたの」
「カン、かな。それにしても久しぶりだね、どうしたのさこんなとこで」

泣き止んだ女の子に、遊んでおいでと奈美は声をかけてやりました。
女の子は大人しく頷いて、滑り台のほうへと走っていきます。

「高校はこっちで通うことになったの」

と、佐那はスケッチブックに目を落としながら言いました。
そこには、桜の木が白い紙いっぱいにえがかれています。
奈美はそれを覗き込み、上手いね、と言って頷きました。

「佐那は昔から絵が上手かったもんね」

二人は古い知り合いなのでしょうか。
桜は、奈美、と呼ばれた少女のほうに見覚えはありました。
そう、去年も奈美は更に小さかった女の子を連れて、ここに遊びに来ていました。
桜を、桜という名前なのだと女の子に教えたのも、奈美だったのを覚えています。

「ここにいたら、奈美にまた会えるかな、と思ってた」
「なんでよ。私たち、小学生のときちょっと一緒だっただけでしょ」
「でも、ここにまた住めるなら奈美に会いたかったから」

佐那の表情は変わりません。
くるくると表情を変える奈美に比べてどうも、何を考えているかわかりにくいのです。

「はあ……」
「奈美、ごめんなさい」

佐那は、そのままぺこりと頭を下げました。

「小学生のとき、なにもあなたに伝えずに、転校してしまってごめんなさい」

ああ、と桜は思い出しました。
もう何年前になるでしょうか。桜の周りでよく遊んでいた、二人の少女がいました。
二人はいつも桜の前で待ち合わせている様子で、仲良く遊んでいるのを微笑ましい気持ちで桜は見守っていたのでした。
ときどき喧嘩もしながら、けれど、翌日には二人で必ず手に手をとりあってここで仲良く過ごしていたのです。

「なによ、今更」

いまさら、という言葉に奈美の寂しさが深く表れているようでした。
奈美はぷいっと横を向きましたが、身体は佐那のほうへ向けたままです。素直になれないのです。

「奈美」
「なに」
「私、今年は桜を二度みたの」
佐那は桜を見上げました。
「4月には、東京で。それでまた、引っ越して5月になってもここで見られるなんてすっかり忘れていたの」
「へー」
そう、桜が咲くのは、そこまで温かくなるのは、この北の大地では5月のことなのです。
佐那の表情の動きはとぼしく、もしかしたら、ぼうっとしているだけにみえるかもしれません。
けれど、桜は思い出していました。佐那は昔からこんな子供でした。
大人しく、ひとりきりのときにはノートを抱えて絵を描いていることの多い少女でした。
ただ、奈美がいれば佐那も、駆けだして遊びに行ったのです。
「今日は、すごく嬉しかった」
佐那は、そこではじめて微笑んだように見えました。
「……私は！　ずっと怒ってたんだからね！」
うん、と怒る奈美にも佐那は穏やかに頷きます。
「前日まで普通に遊んでたのに、翌日からいなくなりましたって言われたら怒るに決まってるでしょ！」
奈美が叫ぶので、女の子が遠くでびっくりしています。
そして、こちらに向かって慌てて走ってきました。
「私のこと、忘れないでいてくれたんだね」

そして、佐那は抱えていたスケッチブックを傍らに置くと、両手で奈美の右手をとりました。
奈美はかあっと顔を赤くしたけれど、手は振りほどきません。
「奈美ちゃん、どうしたの。痛い痛いの？」
女の子は、奈美の左の袖を掴んで心配そうにしています。
二人に挟まれて、奈美はただふるふると顔を振りました。
「ごめんね、言いたかったけど、どうしても言い出せなくて……」
奈美は、ショックだったのです。仲がいいと思っていた友達が、何も告げずに突然転校してしまったことに。
その佐那が突然現れて、会いたかったなどというのです。混乱して当然でした。
「だったら、家に会いにきてくれたらよかったじゃない……」
「よくここで遊んでたから、家のことまで覚えてなかったの。だからここにいたらいつか会えると思って」
だから5月という中途半端な時期に、佐那と奈美は再会を果たしたのでしょう。
佐那は桜の目覚める前から、ここに通って来ていたのでしょう。
「お姉ちゃん、奈美ちゃんをいじめちゃだめ」
「い、いじめてないよ」
女の子はキリッとした顔で、ついさっきまで泣きべそをかいていた女の子とは思えない勇ましさです。
佐那はちょっとびっくりして、それから、違うよ、と優しく言いました。
「お姉ちゃんは、むかしね、悪いことしちゃったの。だから、ごめんなさいってしているんだよ」
「じゃあ、それでも怒っている奈美ちゃんがだめなの？」
「そうじゃないよ。許してくれないのは、仕方ないかも」
「そうなの？」

女の子は、おずおずと奈美を見上げます。
「はっ、恥ずかしいだけに決まってるでしょ！」
奈美はいたたまれなくなってしまったようでした。
「じゃあ、また仲良くしてくれる？」
「……あんたのその制服、私のと違う。高校、違うんじゃないの」
「え？　あ、この水色のセーター？　これ前の学校から持ってきたんだよ。北海道はまだちょっと肌寒くて」
「はあ……おしゃれなことで」
佐那が自分の高校を言うと、奈美はほっとしたように頷きました。きっと同じだったのでしょう。
それからわしわしと頭をかいて、観念したように大きくため息をつきました。
「そうだよね、佐那ったら私がいないとずーっと絵だけ描いてる子だったもんね」
「い、言わないで」
「で、休日なのに制服なのはどうして？」
「同世代だとすぐわかって、奈美がみつけてくれやすいかなと思って……」
「セーターがそれだと意味なくない？」
からかうように言われ、今度は佐那が顔を赤くする番です。
でも、似合ってるからいいんじゃない、と奈美は笑いました。
「うん、お姉ちゃんのセーターきれい！」
「ありがとう。えっと……」
「あたしは歩美だよ！」
「ありがとう、あゆみちゃん」
妹さん産まれてたんだね、という佐那でしたが、奈美は私のお姉ちゃんの子だよ、と返しています。
お姉ちゃんと呼んでいますが、姪っ子ということなのでしょう。
そして、歩美と名乗った女の子は背にしょっていたリュックを開いて、小さ

なノートとクレヨンを取り出しました。

「あたしもお絵描き、するー」

奈美はびっくりして、佐那の隣に座る歩美をみつめています。

けれど、たまにはこんな遊びもいいかと、歩美を挟んで二人は座りました。

「あゆみちゃん、お姉ちゃんは、あゆみちゃんと奈美の絵を描いてもいいかな？」

「あたしとお姉ちゃんのこと描いてくれるの！？　嬉しい！」

「えっ、いやちょっと、そんな心の準備が」

「自然にしていてくれたらいいよ。勝手に描いてるから」

無邪気に喜ぶ歩美をよそに、奈美はあわてて髪を撫でつけています。

それにくすくす笑う佐那に気づくと、ばつが悪そうな顔をして……それから、ふっと笑います。

「それにしても、もう五月だよ？　新学期はじまって一か月もたつっていうのに、お互いの存在に気づけないなんてね」

「クラスが多いから、仕方ないよ」

「もう、円山（まるやま）の桜は描いたの？」

「まだ。こっちに来てからはずっと、ここに来ていたから」

「うっそ、もったいない」

「今度、連れて行ってくれる？」

「仕方ないなぁ」

少女たちは、既にかつての親しさを取り戻したように打ち解けているようでした。

そしてどちらからともなく、口をそろえて言います。

「これからも、よろしくね」

桜は風もないのに、二人を再会を祝福するように大きく枝を揺らしました。

三人の髪の上に、ひらひらと桜のはなびらが降り注ぎます。

歩美は楽しそうにそれを見上げ、二人の少女は、風もないのにと不思議そう

に首をかしげていました。

桜は、あのいじわるすずめがまたやってきてくれるのを、楽しみにすることにしました。

きみがいるからひとりぼっちなんかじゃないよ、と言うと決めたのです。

すずめはどんな顔をしてくれることでしょう。

今年の目覚めている間に、また来てくれるでしょうか。

そして、今見た少女たちの話を聞かせてやるんだ、とわくわくする気持ちが膨れ上がるのでした。

# 猫の散歩

ふわあぁ、とその猫はひとつ大きなあくびをしました。
塀の上をのんびりと歩いています。
お日様が顔を出したばかりなので、外は薄暗くて、まだまだ早い時間です。
けれど、それだけ外に出ている生き物は少ない時間なのです。

「やぁ、おはよう、ラッキー！」

ラッキーと呼ばれた猫は、のっそりと気だるげに振り返りました。
そこでは魚屋のおじさんがひらひらと機嫌よさそうに手を振っています。
どうやら「いちば」というところで仕入れから帰ってきたばかりのようです。

「今日も一匹食べていくかい！」

にゃあ、と一声返事をすると、うんうん、とおじさんは満足げに何度も頷きました。
声の大きなおじさんです。
聞こえているのだから、もっと静かに喋ったらいいのに、と猫はいつも思っています。
でも、近寄っていくと大好きな魚を一匹投げてくれるので、すりすりと頭をその足に擦りつけました。

「今日もたっくさん魚が売れるように、お前も祈っておいておくれよ」

力の強い撫で方は、ちょっとだけ鬱陶しいです。
仕方なくもぐもぐと食べ終えると、ふいっと歩いてまた旅立ちました。

「こんにちは、ミミちゃん」

猫の隣にしゃがみ込んだ少女は、にっこりと微笑んで挨拶をしてきました。

ベンチの下で昼寝をしていたところだったので、猫は少し不機嫌そうにします。
少女はそんなことには気づかず、赤い大きなリュックをひょいとベンチの傍らに置きました。
「なでなでしてあげるよ、お膝においで」
けれど少女のなでなでは、温かくて優しくて、とびきり気持ちがいいのです。
ベンチに座った少女の膝にひょいと飛び乗り、再びうずくまります。
えへへ、と笑う少女の声を聞きながら、猫はまた目を閉じました。
少女はいつまでも、そうして撫で続けていました。
「ミミちゃんの身体は、サラサラしていつも気持ちがいいねぇ」
当然だろう、と猫は心の中で胸を張っていました。

「ただいま、タマ」
扉を開けてふらふらと入り込んできた女に、にゃあ、と猫はひとつ鳴きました。
女はそれを出迎えとばかりに喜んでいますが、違うのです。
猫は、女の帰りが遅いとご飯がないことを怒っているのです。
「君だけだよぉ、私のことをそんなふうに慕ってくれるのは」
思い上がられては困ります。
けれどご飯がなくては困るので、猫は仕方なくその足に頬を擦りつけました。
疲れ切った肩を下げて、女は重い身体を引きずるようにしてキッチンへと向かいます。
「そうだ、今日は私とタマが出会った記念日だったでしょう」
ポケットから女が取り出した包み。
思わず猫が前足を伸ばしてそれに触れようとすると、女はまてまてと笑って

包みを開けてくれました。

「ほら、鈴がついたリボンの首輪だよ。私のケータイ番号が書いたタグがついてる。これでなにかあっても大丈夫だ」

なにかあったらとは、いったいなんでしょう。
よくわかりませんでしたが、女のつけてくれた鈴のついた赤いリボンの首輪のことは、とっても気に入りました。
ひらひらとしていて、少し身体を動かすだけで、ちりりん、と鈴が涼しい音をたてます。

「よしよし、よく似合ってる」

そう言って笑う女はいつもひどく疲れていて、猫は首をかしげてしまいます。
仕事なんてやめて、猫になってしまったらいいのに。
そうしたら、好きな人間と好きなだけ触れ合うことができるのです。
そう、自分のように。
でも、女は猫を羨ましがってはいますが、なぜか猫になりたいわけではないようでした。

ふにゃあ、と甘える声をひとつだして、ご飯を食べた猫はまるくなって眠ります。
女の眠りかけた布団に潜り込んで、彼女の顔が嬉しそうに綻ぶのを見届けてから。
そして、明日は誰のところに会いに行こうかにゃあ、なんて、考えながら。

# 猫の夢

ぽうん。ぽうん。
猫が雲の上を歩いていくと、トランポリンのように身体は軽く飛び上がります。
猫は目をぱちぱちとしばたたかせて、身体が跳ねるがままに身を任せています。
ちょっとずつしか進むことはできませんが、それはそれは楽しいのです。

ぽーん、ぽーん……とと－ん！
はずみで高いところに飛び上がった猫は、ピンク色をした雲の上に降り立ちました。
そのまま前へと進んでいくと、なんとたくさんのカリカリが猫のために置いてあります。
猫はそれが大好物なのです。
ぱくんと加えて、カリカリ、カリカリとそれをかじります。

そうしながら、あたりをじっくりと眺めまわしました。
ここには色とりどりの雲が浮かんでいて、いい匂いが漂ってきます。

あっ、あれは魚を焼く匂いでしょうか。
ヒクヒクと鼻を動かしてみながら一歩足を踏み出すと、またぽーん！と猫は飛び上がりました。
そして今度は、淡い緑色をした雲に降り立ちます。

あっ！　と驚いた猫の前に、さあ食べてくださいと言わんばかりの焼きたての魚が置いてあります。
明らかにあやしい、けれど辺りを観察するためにくんくんと匂いを嗅ごうとすると、
嫌でもその魚の美味しそうな匂いが届いてきてしまうのです。
じゅるり、と音をたてるほどに猫の口の中に唾がたまってしまいます。

目をぎゅっとつむった猫は、思い切ってそのままパクッ！と魚に飛びつきました。

ああ、美味しい！
パキパキと骨をかみ砕きますが、不思議とちっともそれはいつものように頬を内側から刺して来たりしません。
じゅわっと脂の乗った身が口の中で広がって、猫をただただうっとりとした世界に誘うのです。

がぶがぶ、がぶがぶ、と猫は魚を堪能し、やがてお腹はいっぱいになりました。
けれど、どうしたことでしょう。
いつもよりずっとたくさん食べたはずなのに、猫はちっともお腹が苦しくならないのです。

次に何を食べよう。
そう思って見上げた猫の視線の先に、今度は黒い雲が漂っていました。
なんだか怖いなぁ、と思いながら、ぽーん！　ともう慣れた足つきで飛び上がります。

けれど下りたったすぐから、猫の顔はぱっと輝きました。
なんと、その黒い雲はチョコレートそのものだったのです。
ぺろぺろと舐めた先から、猫を心をじーんと満たしてくれるのです。
猫は、ほんとうは甘いものを感じることができない生き物です。
でも、夢の中のそれはとっても甘くて……猫は、ふにゃあ、と思わずご機嫌な声を漏らしました。

ふうぅ。
猫はなんだか喉が乾いてきました。
そう思って見上げた先には、何故だか普通の白い雲。
なんだぁ、と猫は肩を落としましたが、思い切ってぽーん！と飛び上がります。

その白い雲に降り立った途端、猫はつるんっ！と足を滑らせました。
ニャァ！と悲鳴をあげましたが、ひっくり返ってから気づきました。
おそるおそるうつぶせになって、ぺろりとそこを舐めてみます。

すると、思ったとおり！
そこはとても甘くて、冷たくて……そう、アイスキャンディで出来た雲だっ

たのです。
だから白かったのですね。
猫はそのまま機嫌よく、ぺろぺろ、しゃくしゃく、ぱきっ、とそれを舐めたりかじったりし続けました。
たくさんたくさん舐めても、雲は大きいので、まだまだたくさん舐めることができそうです。

ふにゃぁ。
でも、猫はだんだんそれにも飽きてきました。
頭の上では、様々な色の雲がいくつもいくつも、漂うようにゆっくりと流れていきます。
あそこには、どんな美味しいものが待っているのでしょう。
けれど、白い雲はつるつると滑るので、猫は飛び上がることができないのです。

猫はとっても困りました。
なんとか飛び上がろうとうんと背を伸ばしてみますが、やっぱりすぐにぺたんと身体が地面についてしまいます。
猫は美味しいものがもっともっと食べたいのです。
あの紫色や、緑の雲にはいったいどんな美味しいものが待っているのか、とても知りたかったのです。

けれど、猫はとうとう、身体ごとつるんとすべらせて、飛び上がるどころか身体は真っ逆さまにおちていきました。
ひゅうう〜。
ひゅうう〜……。

ごちん！　と床に頭をぶつけたところで猫は目覚めました。
むにゃむにゃ、と頭をこすったところで、今までのことが夢だったのだと知りました。

猫はむすっと顔を歪めて、もう一度同居人のベッドに潜り込みます。
ふわぁあとあくびをひとつして、そうして再び夢の中へ。
さて、猫はまた、同じ夢がみられるのでしょうか？

# 季節の音

『先生へ

久しぶり！
ちゃんと届いているかな？
――って、ちょっとドキドキしながら書いてます。
未来の自分に手紙を書きましょうって
イベントなのに先生宛に出しちゃった。
びっくりした？
私からのサプライズプレゼントだよ☆　なんちゃって。

あれから元気にしてた？
ちゃんと寝てる？
ごはん食べてる？
ポテトばっかり食べててもだめなんだよ？

そういえばどうして「先生」っていうあだ名になったんだっけ？

テスト勉強の時の教え方が先生みたいだったから
それで先生っていうようになったんだっけ？

今更だけどもっとちゃんとした？あだ名にしとけばよかったよね（笑）
恥ずかしいあだ名つけてごめんね（笑）

あの時は色々あったよね。
楽しい時も、そうじゃない時もずっと先生がいてくれたから
私は毎日ハッピーだったよ。
思い出もいっぱいできたよね。
春の炊事遠足ではカラスに肉を取られ
お祭りではいい年して光るおもちゃにはしゃいで
暑い日は川でダム作って遊んだり

スキー遠足の時なんて、ちょっと吹雪になって軽く遭難しかけたりもしたよね
なんかあほなことばっかりやって遊んでたね。

先生は？
私といて楽しかったって思ってもらえてたらいいな。

これを書くか迷ったんだけど、ここまできたから言うね。

本当はね
先生ともっと一緒にいたかった
いっぱいいっぱいおしゃべりもしたかったよ

進路とか将来とか未来とかさ
今から考えてもわからないのにね
誰にもわからないことを考えるのって大変だよね

先生は季節に音があるってよく言ってたよね。
どんな音なのかな。
きれいな音？
私も先生とその音を聞きたかったな。

この手紙が読まれている時、先生の隣にはどんな素敵な人がいるのかな
先生が選ぶのがどういう人なのか気になる
大人になったら絶対またあほなことして遊ぼうね！』

手紙来てたの？
珍しいー。
あ、これ私が書いたやつじゃん！

やだ恥ずかしい

わぁ…
タイムカプセルのやつってほんとに届くんだねぇ……

あーーー。声に出して読まなくていいです

いやぁ、ほんとやだぁ
昔の私、なんでこんなの書いて残してたんだろ〜

ふふふ、それも青春か。アオハルだね。

そして選ばれたのが私だったとはね
選んだの後悔してない？ふふふ

あなたと一緒にいて、ようやく季節の音の正体もわかったし。
大切な人と過ごすひとときの中で聞こえる色々な音。

ようやく暖かくなって、人間も動物もうきうきするような春の心音
涼しさを求めた夏の水辺の音
秋の枯葉の音
雪がしんしんと積もる静かさ

それが”季節の音”なんだよね。

ふふふ、こんなロマンティックな一面があったとはね。
人って面白いね。

久々にまたこう呼ぼうか

先生、好きだよ

ねぇ、どんなあほなことして遊ぶ？

# 幸せになりたい私たち

「幸せになりたい」
放課後の教室で有紀が言ったひとこと。
幸せってなんだろう？

――放課後。
それは一日で一番楽しい時間。
おかしをつまみ、みんなで「ああでもない」「こうでもない」と語り合う時間。
時折先生にお前ら早く帰れって言われるけどね。

チャイムが鳴っていつもの時間。
「俺さ～、図書室にあの本入れたのすごくね？この学校で最初にBL本を置いた人ってことで、伝説になる気がすんだよね～」
図書委員の美沙子は図書購入の際に自分が好きな男性同士の恋愛を描いた作品を学校に買わせていたのだ。
「あのチョイス、さすがミサだよね～。天才だわ。」
「だろ？ゆっき、もっと褒めて褒めて」
「よーしよしよし、いい子いい子、美沙子ちゃんはいい子だね～」
「有紀ちゃんもいい子いい子」
『あはははは』
美沙子と有紀がふざけて笑いあっている。
二人は小さい時からの幼なじみでとっても仲がいい。
私はみんなとは高校からの付き合いだからこの二人の仲の良さがうらやましい。
「ねぇ、下田っていつから鈴木ココナと付き合ってんの？」
窓辺でジュースを飲んでいたルナがびっくりした声を出す。
クールな性格のルナがこんなに驚くことがあるんだと思うと同時に下田くんの名前が出たことに――
「えっ？」
思わず声を出して反応してしまった。
「ほら見てみ、手繋いで歩いてる」
その一言で皆が窓辺に集合する。
三階の窓から下をのぞくと、ルナの言う通り下田くんが二組のココナちゃんと

仲良く手を繋いで帰っていく姿が見えた。
「下田のハートをゲットしたのはココナっちかぁ」
「有紀ちゃん、その言い方おじさんみたい」
有紀の頬を指で軽くつんつんしながらルナが言う。
「あの二人、もうヤッたのかなぁ」
また美沙子の下ネタがはじまった。
「美沙子ってそういう話好きだよね」
「だってさー、付き合うってそういうことじゃん？ルナ様もそういう話好きっしょ？」
「嫌いじゃないけどー、エロ大魔王の美沙子と一緒にされたくなーい」
ルナがスマホをいじりながらツッコミを入れる。
「下田たち、アオハル（青春）だねぇ～。ねぇ、カレシってどうやって作るの？」
机に戻った有紀がポテトチップスを食べながら美沙子に聞く。
「なんで俺なんだよ」
「だってさー、ワタナベといい感じだったじゃん？」
有紀の顔がニヤッとする。
「あ、あいつは……俺の話なんかどうでもいいだろ！それにみんなその話知ってるだろ！？」
珍しく美沙子が困っている。
「忘れたぁ。だーかーら、もう一回教えてよ～」
ニヤニヤしながら有紀が笑う。
「無理！絶対に嫌だね！」
「あはははは」
私たち以外誰もいない教室に有紀の笑い声が響く。

俺っ子の美沙子
美沙子の幼なじみの有紀
ちょっとクールな性格のルナ
そして私・あずさは……主に聞き役かな。
放課後のいつものメンバーと過ごす時間。
私の大切な青春のひととき。

「ルナっちはカレシいたら幸せ？」
有紀が質問をする。
「えー……幸せなんじゃない？」

スマホに集中していたルナが少し困惑気味に答える。
「あずさっちは？下田くんのことは残念だったけど、他にもかっこいい男子いるし！やっぱり早くカレシほしい？」
今度は私に質問がきた。
下田くんは部活を頑張っていて、性格も優しくて、何よりも笑った時の顔がとってもかわいくて、入学間もないころから密かにずっといいなと思っていた。だからといって何かアプローチをすることもなく、淡い恋心のままで今回は終わったわけで。
「……でもさ、恋愛だけが全てじゃないよね」
少し考えてからそう答えると
『確かに～』
三人の声がハモる。
「やっぱりー、お金、ほしいよね～。新しい服買いたーい。早く石油王が私の動画チャンネルみつけてくれないかなぁ。」
有紀は動画サイトに顔出しで出演していて、私たちも面白がってよく有紀の動画作りを手伝っている。
「あー、石油王からの投げ銭ほしいなー」
「有紀ちゃんったら、またそういうことといって。そういう人はそれなりの努力してるんだから、ただ待っててもダメじゃない？」
ルナが有紀に現実を突きつける。
「有紀ちゃんの動画ってさー、ここが惜しいんだよねー」
スマホで有紀の動画を再生し、ぐっと音量を上げる。
「ちょっと恥ずかしいからやめてよ～」
「今うちらしかいないから大丈夫でしょ。それに恥ずかしいと思うなら動画上げるのやめたらぁ？」
ルナが小悪魔スマイルを浮かべる。
「ははは。ルナ様、ゆっきいじって遊ぶのはその辺にしといてやれよ」
美沙子が間に入る。
「学校の中で再生されるのが嫌なだけで、内容には自信あるもん」
ふてくされた有紀が言う。
「この前のメイク動画だってさー、ちょっとバズったじゃん？やっぱりみんなかわいくなりたいんだよね。あのシリーズまたやろっかなぁ？」
「うん、あの動画とってもよかったよ！あぁ、私もココナちゃんみたいなかわいい顔に生まれたかったなぁ～」
「わかる。俺なんてこの体系だから何やってもだめだし」
私のつぶやきに美沙子が自分のお腹のお肉をつまみながら反応する。

「ミサコ・デラックスって、よく中学の時に言われてたもんねぇ。美沙子も怒ればいいのに、それをギャグにしちゃうんだもん、よくやるわ」
ルナが苦笑する。
ルナとは対照的に有紀は
「懐かしい！あの時のモノマネ、超似てたよね！」
「よし、じゃあまたアレを披露するとしますか！」

『きゃはははは』

美沙子のモノマネを見た私たちの大爆笑が納まり、しばらくして
「はぁ～、早く幸せになりたいわ～」
有紀の唐突な発言。
「有紀ちゃんそんなに不幸なの？」
ルナの言葉に有紀は
「んー……そうじゃないんだよなぁ。なんていうのかなぁ……。こうさ、よりハッピーになりたいんだよ！」
「なんだそれ。将来ヤバイ宗教とかにハマってそうだな。気をつけろよ」
「あぁ、それうちもちょっと思った」
「ミサもルナっちもひどくない！？そういうのじゃないもん、大丈夫だし！」
「大丈夫って言ってるヤツが一番ヤバいんだよなぁ。俺ん家の隣のばぁさんもオレオレ詐欺にひっかかりそうになってたし」
「若い人でもSNSで知り合った人にアプリに誘導されて、お金取られるとかあるもんね。
それで兄ちゃんの友達が何万とか払ってたもん。バカだよね。」
「二人ともそういう怖い話はやめてよー。あ、あずさまでそういう話しなくていいからね？」
皆で笑う。
「そろそろタカシ来そうな時間」
もうすぐ先生が教室に見回りに来る時間だった。
「そうだね、早く帰れって怒られる前に帰ろうか」
私は椅子から立ち上がり、机の上のお菓子のゴミを集める。
「しょーがない、片付けるか」
有紀もポイポイとゴミをつかんでいく。
「えー、やだーー。たかっしーにバイバイしてから帰るぅ」
ちょっと甘えた声で美沙子が駄々をこねる。
「ミサってほんとタカシ好きだよね。黒板消しに向かって喋る男のどこがいい

の？」
「後ろの席だとさー、タカシの声聞こえないんだよね。もっと大きい声で授業しろっつーの！」
「そういうルナ様はたかっしーの授業で起きてたことあるか？」
「だってさ、タカシの声って呪文みたいで眠くなるじゃん」
「わかる～」
ルナの言葉に有紀が同意する。
「呪文がなんだって？」
タカシ先生が呆れた顔で教室の入り口に立っていた。
「毎日毎日何をするでもなく遅くまで残って……。お前らそんなに学校好きならここに泊っていくか？」
「たかっしーとお泊まりなら喜んで」
美沙子の目にハートマークが浮かんでいる。
「だからそのたかっしーはやめろって言ってるだろ。大橋、早く帰れ」
「いやよいやよも好きのうちっていうじゃん？素直になろうよぅ」
「大橋美沙子他三名、今すぐ帰ること。いいな」
美沙子の発言を完全スルーし、タカシ先生は戻っていった。
「じゃあね、たかっしー！」
急いで廊下に顔を出し、大声で大好きなタカシ先生に挨拶をする美沙子。

学校を出て、四人並んで歩く。
「さっきの話だけどさ」
「幸せになりたいってやつ？」
「頭良くて、いい大学いけば幸せかなぁ？」
「まだその話続くの？」
ルナがうんざりした顔をする。
「だってさー、いい学校行けばそのぶん高収入男子と出会う確率もあがるでしょ？
昼間にヨガ教室通ったり、優雅にランチするような主婦になりたーい」
「はいはい」
「君らはいいよなぁ」
「どうした美沙子？」
「俺んちは農家だから家継ぐしか道がないようなもんだからなぁ」
「あぁ、そっかぁ」
「家の仕事も大事じゃん」
「そうだよ、美沙子ん家が作るものみんなおいしいし！」

「ネット販売とか楽しそうだよね。発送とか楽しそう！」

みんながわいわい話しているのを聞きながら私は考えた。
何をしたら幸せになれるのか。

イケメン彼氏をゲットする
整形して美女になる
趣味に打ち込む
学年一位の成績を修める
いい学校に行く
いい会社に就職する
お金持ちになる
幸せな家庭を気付く・・・

きっとどれが「幸せ」なのかは人それぞれだと思う。
私は何をしたら幸せなのかな。

こうやってこの三人と毎日楽しく過ごせることが幸せなのかな。

人生何が起こるかわからない。
極端な話、明日地球が滅亡するかもしれない。
先のことは誰にもわからないけど、大人になってもおばあちゃんになってもずっとずーっとこの関係が続いているといいな。

# あとがき

札幌市民の花見は「円山＝円山公園」でという人がやはり多いのでしょうか。ここ数年は自粛が求められている世の中ですが、『Hello,Again』の佐那と奈美にはきれいな円山の桜を堪能してもらい、そして隣の北海道神宮にも行ってほしいですね。

『Hello,Again』が札幌（都会）の話なら、『幸せになりたい私たち』は北海道の田舎町が舞台です。作中では明確にしていませんが、私の地元（道南）をイメージし、登場人物は友人たちをモデルに、街中でたまたますれ違った女の子たちが「幸せになりたい」と会話していたのを聞いたのがきっかけで生まれた作品です。

『猫の散歩』『猫の夢』のネコちゃんもとても楽しそうに暮らしていますね。きっとこの子も毎日幸せでしょうね。
あぁ、私もネコになりたい。

『季節の音』は、文字だけでみるとわかりづらいですね…。
是非、ボイス＆手紙画像と共にお楽しみください！

さて、幸せって一体なんでしょうか。

私は「自分の作りたいものを作れること」かなと、ちょっとかっこつけてみます。

くろねこチップス・黒松あやめ

# 奥付

著者

くろねこチップス
『季節の音』
『幸せになりたい私たち』

柊ユーリ
『Hello,Again』
『猫の散歩』
『猫の夢』

この作品はフィクションです。
実在の人物・名称・団体などとは関係ありません。